

第 283 回ヘルスケア研究会

保健指導の成果が上がらない人達とどう向き合うか — 医療における二人称的参画について考えてみよう

(講師) 岩田 誠先生 (東京女子医科大学名誉教授 メディカルクリニック柿の木坂院長)

(司会) 鷺崎 誠先生 (健康管理コンサルタントセンター会長)

医療従事者は保健指導の際、客観的なデータ等を示しながら説明をすることが多い。わかりやすく心掛けていても患者の納得を得られるとは限らず、治療成果につながらない場合もある。いかにして保健指導の提案を理解してもらうか。1月30日に開催されたヘルスケア研究会では、この根本的な課題をテーマに、東京女子医科大学名誉教授で日々認知症患者の診療にも携わる開業医の岩田誠先生が、医療従事者としての考え方から実践的な指導法まで、多岐に渡る内容の講演を行った。

岩田先生は講演の冒頭、自然科学としての医療について、理論性、客観性、普遍性の3本柱から成ると解説した。その上で、特定のものは全てどう振る舞うか予測可能であり、予測



可能なものは「私」と「それ」という関係性にあると定義付けた。「この関係は“過去に一度も裏切られたことがない”という事実の上に成り立っている。例えば、水素原子が裏切ってMRIの画像が出てこない、などという事態は過去に一度もない。だから次も大丈夫、という風に」。

一方、これと同時に「私」と「あなた」という別の関係性も存在する。医療の場で「あなた」に当たるのは目の前の患者。「私」と「あなた」の関係は一時的なもので、次の患者との「私」と「あなた」は、前の患者との関係性とは全く別物である。予測が可能な「それ」との関係、反対に予測不可能な「あなた」との関係、両方が同時に存在する医療の世界。「だからこそ、この仕事は非常に難しい」と岩田先生は指摘し、治療成果

を上げるために医療従事者は「患者と一緒に考える癖」をつけ、良好な関係を築いていくことが必要不可欠であると強調した。

次に岩田先生は、自身の親族や患者との体験を例にあげて、認知症患者との接し方について次のように語った。「自宅生活が困難な認知症患者に老人ホームなどを勧めても、すんなり入居する人はまず皆無。同じ話を何度もするのは当たり前だし、提案を受け入れてもらうには時間がかかる。根気強く、無理強いせず、患者が何を考えているか知ろうとしてほしい」。また、認知症患者に対して「自分なら一回言われれば覚えているのに」という一人称的思考のまま対応するのは「絶対にやってはいけない」とし、「まず必要なのは、なぜそのような行動をするのかを理解し、患者一人ひとりと関係性を築いていく。その努力を続けていくことが肝要である」と力説した。

その上で、二人称的参画について、「患者が思い描く“真実”と、医者が知識として持つ“事実”は全く異なるもの、という考えに基づき患者と対話する手法」とし、「知識の“事実”をもって患者の“真実”を説得する（三人称的説得）のは間違いで、患者に寄り添い、彼らの“真実”を用いて、こちら側の“事実”を納得してもらうのが正しい方法である。『あなたが思うことは確かにそうだから、こういう風にしたら解決するかも』と導いていくことが大切」と説いた。また、「準備段階で体制を整えれば指導がスムーズに進むだけでなく、認知症患者の人権と尊厳を守ることにもなる。患者との接し方について、事前に家族やケアスタッフなど周囲と相談しておくことも重要だ」と補足した。

岩田先生は続けて、「ヘルスケア研修会」でも使われている「ケア」という言葉の意味について、「ケア」と「キュア」の違いを示しつつ、自身の見識を披露した。

岩田先生によると、「キュア」というのは、cura（クーラ）というラテン語から来ていて、ラテン語の英語系が cure（キュア）。クーラは「世話する」という意味である。「ケア」に当たるラテン語はなく、古い英語に cearu（ケイル）という言葉があり、それがケアの語源で「心配する」という意味。クーラは「お世話する」。ケイルは「心配する」。

岩田先生は、「この二つは似たような言葉だが視点が違う。ケア＝ケイル＝『心配する』は相手の身になって考えること、Sympathy『共感』と呼ばれているものだ。私が大事に思っていることは、医療の現場で、患者と『私』と『あなた』の関係をどうやって築いていくのかということ。『私』と『あなた』の関係は、こちらが築こうとしなければ築くことができない関係。そのためには患者と仲良くなる、患者の思っていること、考えていること、それをできる限り自分のこととして、『共感』を持つことが大事」と力を込める。

最後に岩田先生は、「認知症の症状が出て、その人らしく生き続けるにはどうしたらいいかを考えるのが、医療従事者ひいては社会全体の役割だと思う。患者の想いや考えに最大限の共感を持って接すること。それが何よりも大事」と述べ、その根底に産業保健現場での保健指導にも通じる受診者との関わり方があることを示唆して講演を閉じた。